

正二くんの時計

小川未明

青空文庫

正二くんは時計がほしかったので、これまでいくたびもお父さんや、お母さんに、買ってくださいと頼んだけれども、そのたびに、

「中、学へ上がるときに買ってあげます。いまのうちはいりません。」というご返事でした。

戦争がはじまってから、時計は、もう外国からこなくなれば、国内でも造らなくなつたという話を聞くと、正二くんは、「売っているうちに、早く買ってもらいたいものだ。」と思つたのです。それで、お父さんに向かつて、またお頼みしたのでした。すると、

「なくなることはない。高たかくなっても、お前まえが中ちゅう学がくへ上あがる
ときには買かってやるから、心しん配ぱいしなくていい。」と、お父とうさん
は、いわれたのでした。

学がっ校こうでは、小谷おたにも、安田やすだも、森もりも、みんな時とけい計けいを持もっていま
した。いままで持もっていなかっただ高橋たかはしも、このごろ買かってもら
ったといっていました。正二しょうじくんは、みんなが上着うわぎのそでをち
よつとまくって時とけい計けいを見みるときのようすが、目めについていてうら
やましくなりました。時とけい計けいがあると徒競走ときようそうをしても、タイムが
取とれるし、学がっ校こうへいくバスの中なかでも時とけい計けいがあれば、安あん心しんでき
ると思おもったのです。正二しょうじくんは、いつか兄にいさんがいい時とけい計けいを買か
いたいといっていたことを思い出だして、兄にいさんのところへいきま

した。

「兄さん、いつ時計を買うの。」

「まだわからない。」

「買ったたら、兄さんの時計を僕におくれよ。」といいました。

「ああ、やるけれど、一年先だか、二年先だかわからないぞ。」

「えつ、一年も、二年も……。」

正二くんは、目を大きくみはつたのです。

「うちに、お父さんの前に持っていた、大きな時計があつたらう。

あれをもらうさ。」と、兄さんがいきました。

それは、大型の、ひもで下げる昔ふうのものでした。商店

か、古道具屋の店頭でもなければ、見られぬものです。

「やだ、あんな昔むかしのものなんか。」と、さすがに正二くんも、おかしくなつて、笑わらいました。

「ぼか、あれは、機き械かいがいいのだ。この時計とけいなんかとくらべものならぬほど正せい確かくなんだ。」と、兄にいさんは、自じ分ぶんの時とけい計けいをながめました。

「じゃ、兄にいさん、あれをおもらいよ。」

「あんなの下さげて歩あるけるか。」

これを聞きくと、正二くんは、お父とうさんのもとへ飛とんでいきました。

「お父とうさん、僕ぼくに、大おおきな時とけい計けいをおくれよ。」

「あれは、おまえなどの持もつ時とけい計けいではない。中ちゅう学がくへ上あがると

き、いい腕時計を買ってやるから。」

「僕、待ちきれないんだよ、だから、あの大きいのをくれてもいいでしょう。」

お父さんは、だまつていられました。

正二くんは、お父さんのへやへ入って、方々のひきだしを開けて、大きな銀時計をさがしました。

やっとそれを見つけると、お父さんの前に持ってきて、「もらつていいでしょう。」といいました。

「それをやる代わりに、もうほかのを買ってやらないぞ。」

「ああ、いいです。」

正二くんは、時計のひもをバンドに結んで、外へ出かけまし

た。友だちに見せるつもりです。

「正ちゃんのは、すばらしく大きいんだね。」と、秀ちゃんが、
いいました。

「これは、下げるんだね、昔の時計だろう。」と、賢吉くんが、
いいました。

「正ちゃんの時計の音は、ここまできこえる。」と、秀ちゃんが、
すこし離れたところに立っていて、いいました。

正二は、こんな時計を学校へ持っていったら、きつと小谷
や、森に笑われるだろうと思つたので、お母さんに、預かつても
らうことにしました。

「しかたがないから、四月まで待とうか、それともお姉さんがき

たら頼たのんでみようか。」と、正二しょうじくんは、いろいろ考かんえたのでした。

正二しょうじの姉ねえさんは、お嫁よめにいつていました。けれど、末すえの弟おとうとの正二しょうじくんをかわいがつていたのです。

ある日ひ、久ひさしぶりで家いえへきたお姉ねえさんは、正二しょうじくんから、時と計けいを買かつてくれとせがまれました。

「そんなにほしいのなら、買かつてあげます。そのかわり、いい成せ績せいで卒そつぎ業ぎょうなさいね。」と、お姉ねえさんは、町まちへいつて、正二しょうじくんに、学がく生せい向むきの腕うで時どけい計けいを買かつてくさいました。新しん型がたで、いかに機き械かいが精せい巧こうそうです。正二しょうじは、それを腕うでにはめて、喜よろこんで飛とびまわりました。

「どれ、お見せ。僕のよりも、いいようだぞ。」と、兄さんまでが、いったので、正二くんは、得意でした。

翌日、さつそくその腕時計をして、学校へいきました。

「いいのを君買ったね。」と、いちばんにそれを見つけて、駆け寄ったのは小谷でありました。

「僕のと、同じようだけど、ちつとちがつているね。」と、小谷は、自分の腕時計と見くらべていました。

「ははあ、君のと三分ちがつているが、どつちが正しいんだかな。」と、正二くんが、いいました。

「それは、僕のが正しいんだとも、昨夜ラジオに合わせたのだもの。」と、小谷が、答えました。

「僕も合わしたんだよ。」

二人は、そろって教員室の前へ行って、時計を見ると、どちらもちがっていました。それでいずれが正しいのか、わかりませんでした。

正二くんは、学校で撃剣をして、家へ帰りました。見ると、時計が、止まっています。

「おかしいな。お母さん、僕の時計が止まっています。撃剣をすると止まるもんですか。」

「そんなことはありません。ねじがゆるんだのでしょう。」

「あ、そうか。」

正二くんは、ねじをかけて、外へ遊びに出ました。そして、

友だちとボールを投げたのです。ふと、時計を見ると、また針が止まっていました。

「だめだ、こんな時計は、見かけだけで……。」と、正二くんは、なにかしらん腹立たしくなりました。家へ帰って、お母さんに告げると、

「買ったばかりですから、店へ持って行ってなおさせてあげます。」と、おっしゃいました。

正二くんは、見たところ精巧そうな時計が、ちつとも精巧でないのです、がっかりしてしまいました。

学校へ行って、このことを友だちに話すと、

「僕の時計も、すこし運動すると止まるんだよ。」と、小谷が、

いいました。

夕ゆう飯はんのときに、その話はなしがでると、兄にいさんは、笑わらって、

「役やくにも立たたぬものを、体てい裁さいだけでごまかすなんて、ほんとうにわるいことだな。」と、いわれたのでした。

「なんのための時計とけいだか、わかりませんね。」と、正しょうじ二じが、いいました。

「いままでのような世よの中なかでは、しかたがない。見みかけはどんなでも、ほんとうに役やくに立たつものを造つくらなければ、なんの値ね打うちちもないのだ。人にんげん間まも同おなじことだぞ。」と、お父とうさんが、おっしやいました。

それは、体たい操そうの時間じかんでした。先せん生せいが、ポケツトから、大おおき

な時計を出して、時間を見てもらいました。正二は、自分の大きな時計によく似ているなと思って、見ていました。

「先生の時計は、大きいなあ。」と、笑ったものがあります。

先生は、こちらを向いて、

「君たちの時計は、見かけばかりで、すこし運動すると止まるのだろう。形などはどうでもいい。機械は、このほうがずつとい
いんだ。」と、おっしゃいました。

その明るる日から、正二くんは、お母さんにあずけてあった時計を下げて、平気で学校へいくようになりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「台湾日日新報 夕刊」

1940（昭和15）年2月8日、9日

※表題は底本では、「正二《しょうじ》くんの時計《とけい》」
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

正二くんの時計

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>